

小学生における体力の向上及び運動習慣の形成と 基礎基本運動の習熟に関する研究

A Study on the Skill of the Improvement of “The Physical Fitness and Formation of Daily Sports Behavior and Basic Skill for Elementary School Students”

林 園子¹⁾ 畑 攻²⁾ 池田 延行³⁾
前田 佳奈⁴⁾ 小山 さなえ⁵⁾

Sonoko HAYASHI, Osamu HATA, Nobuyuki IKEDA
Kana MAEDA and Sanae KOYAMA

Abstract

Recently, the descending trend of Japanese children's physical fitness ability has been highlighted, and become a serious problem of our society. The Ministry of Education, Culture, Sports and Technology has pointed out that physical strength of children is tending downward after the peak in 1985. Furthermore, children have been remarkably divided into two; who play exercises and sports and who not play. The decline of ability to move their bodies as they wanted has been appeared as well.

This study was to clarify “the skill situation of the basic skill for sports activity”, in terms of the characteristic of the children, physical fitness and connection with an actual condition of the daily sports behavior. The influence that basic skill brought to each research element was examined.

The results and conclusion were summarized as follows;

- (1) Acquisition of basic skill is closely linked to the progress of physical fitness and the formation of daily sports behavior. That strongly demonstrates the importance of foundation and basis, which are acquired in P.E. education at the elementary schools.
- (2) Characteristics of each sport taken up in this study were suggested. That is, even if it is basic skill, a development for teaching-coaching methods making use of the basic skill characteristics is possible, and comes to be necessary.

For the next study, it will broaden the genre of sports, and examine more basic skills of other sports as well as clarify characteristics and significance of basic skill. It's necessary to develop efficient teaching-coaching methods that are utilized for the teaching scene in a practical way.

keywords : Basic skill, Physical fitness, Daily sports behavior

I. 研究の目的

近年、子どもの体力・運動能力の著しい低下が大きな社会問題として挙げられている。文部科学省が実施している「体力・運動能力調査」²⁶⁾の結果の推移によると、昭和60年頃をピークに子どもの体力は低下傾向にあり、さらに運動・スポーツを行う子ども、行わない

子どもの二極化、体を思い通りに動かす能力の低下などがみられていることを指摘している。

このような現状を受け、中教審答申(2002)²⁴⁾は「子どもの体力向上のための総合的な方策」を打ち出し、文部科学省は、平成16年度から「子どもの体力向上実践事業」を3ヵ年計画として全国64の各学校で実施し、子どもの体力向上及び望ましいスポーツ教育へのあり方を問い直す様々な取組みを展開させた。

この実践事業の取組みの成果について前田ら(2007)¹⁸⁾は、「数値目標としての様々な効果を明らかにする必要性」及び「取組みの直接の効果とマネジメントの成果のトータルな評価・検討の必要性」を述べて

1) 日本女子体育大学大学院修士
社会保険中央看護専門学校非常勤講師
2) 日本女子体育大学 (教授)
3) 国士舘大学 (教授)
4) 日本女子体育大学 (助手)
5) 日本女子体育大学大学院修士
中央大学非常勤講師

いる。また、実践事業の取組みを実施している最中である平成18年9月に改定された「スポーツ振興基本計画」²⁵⁾では、新たな政策課題の第一番目の柱に「スポーツの振興に通じた子どもの体力の向上方策」を打ち出しており、もはや子どもの体力の向上は、国家的課題ともなっている。すなわち、体力向上の目標に対してこの実践事業は達成に至っていないのが現状であることを意味している。ここから、各学校の現場において、体力向上の目標を達成させるための「授業づくり」の問題、これからの学習指導要領の方向性の検討から、さらなる具体的な「学習内容の明確化」が求められている。

また、中教審答申(2002)において『体力の低下は、子どもが豊かな人間性や自ら学び自ら考えるといった「生きる力」を身につける上で悪影響を及ぼし、創造性、人間性豊かな人材の育成を妨げる』としている。早い時期に、日常生活の中で運動やスポーツを実践し、親しむことのできる資質を身につけさせることは、体力の向上へ必要不可欠であり、重要な課題であると考えられる。そのために、子どもにとってこれから運動・スポーツを行っていくための土台となる基礎的・基本的な運動を身につけさせ、機能させることが必要なのではないかと考える。小学校学習指導要領²¹⁾は、第9節体育の「第2：各学年の目標及び内容」から第1学年及び第2学年において「基本の運動」の習得を目標としている。この「基本の運動の習得」は、体力を養う重要な要素であるとしている。具体的内容として、「走・跳の運動遊び」「力試しの運動遊び」「器械・器具を使つての運動遊び」「用具を操作する運動遊び」「水遊び及び表現リズム遊び」を挙げている。これを踏まえ、林ら(2007)¹⁰⁾は、これらの学習指導要領の示す「基本の運動」の内容をより具体化するために、新体力テストの項目及び体育の授業内容との関連から「50m走」「逆上がり」「25m水泳」「キャッチボール」「足でのパス」の5種目に注目し、これらの運動種目を「基礎基本運動」と命名した。これらの運動が習得できれば、自ら何度でも取組み、挑戦し、やがて楽しく無意識にできるようになり、それにまつわるスポーツに興味・関心が向上し、意欲の増加及び体力の向上へとつながると考え、体力向上への原動力としての基礎基本運動を確実に理解して習得することの重要性を述べた。

そこで、本研究では「基礎基本運動」に着目し、基礎基本運動の習熟と現代的な課題である「体力の向上」及び日常生活における運動・スポーツ状況を表す「運

動習慣の形成」との関係性を明らかにするとともに、取り上げた基礎基本運動の個々の種目にある特性を、指導や教育につなげるための視点から検討することを目的とした。

II. 研究の方法

1. 基本的アプローチ

図1において、子どもが運動・スポーツに対する興味・関心・意欲への高まり、さらには体力の向上に必要な要素として知ら(2005)¹¹⁾は、時間・場所・用具などの「物理的環境」、友達・仲間・指導者・先生などの「人的環境」、教室・習い事などの「社会的環境」、さらには「親」など直接的な働きかけを挙げている。また、これらの要素を複合的にとらえ、トータルに対応する必要があることを述べている。また前田ら(2006)¹⁵⁾は、文部科学省の「生活実態調査」¹⁶⁾から、「生活習慣」「運動習慣」「意欲」「保護者」の4つの要素が体力向上の重要な要素であることを明らかにした。さらに林ら(2007)は、この4つの要素が基礎基本運動の習熟に重要な役割を示すものであることを明らかにした。本研究では、これらの要素を踏まえ、今回、子どもの客観的指標となる実際の子どもの「体力」と根本的な日常生活における「運動習慣」の実態に着目し、基礎基本運動の習熟との関連性を明確にするものである。

2. 調査実施及び調査方法

本研究の調査は、東京都に所在する研究モデル校として実績のある小学校全学年247名を対象に実施した。

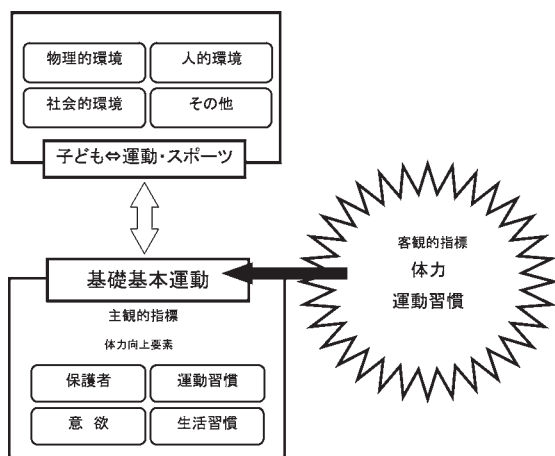


図1 基本的アプローチ

表1 調査方法の概要

調査方法	調査内容	対象者	期 間
新体力テスト	握力 上体起こし 長座体前屈 20m シャトルラン 50m 走 立ち幅とび ソフトボール投げ	全児童	平成19年 6月
歩数	万歩計にて測定	全児童	平成19年 4月～平成20年 3月 月 1回 (土日 4日分+平日 5日分) 9日間
アンケート	基本的特性 スポーツ特性 運動生活 スポーツ環境 ライフスタイル マルチスポーツ 基礎基本運動達成度	1～4年生：保護者 5・6年生：児童	平成19年11月下旬～12月上旬 対象者 247名 有効回答数228名 (91.28%)

本研究で用いた調査内容は、新体力テスト、歩数調査及び独自のアンケート調査の3調査を実施した。具体的な概要は表1に示すとおりである。

新体力テストは、調査対象校の平成19年度に実施した「新体力テスト総合評価」を使用した。これは子どもの「体力」の現状を把握するための有効な手がかりとなるものである。歩数調査は、平成19年4月から翌年3月まで8月を除く11ヶ月間、月1回9日間(土曜日から翌週日曜日まで)の測定を行った。歩数は、子どもの日常生活における「運動習慣」の実態を把握するためのひとつの指標となるものである。アンケート調査において、調査項目は、子どもの基本的特性及びスポーツ特性、佐伯ら(1998)⁴⁾のマルチスポーツ概念に基づき福本(2000)⁶⁾、久野(2006)⁷⁾により具体化されたマルチスポーツに関する13項目、小学校学習指導要領において、「基本の運動」の内容を具体化した「基礎基本運動」5種目における子どもの運動達成度の項目から設定した。有効回答数は228名(91.28%)であった。子どもの性別及び学年別の詳細は表2に示すとおりである。

これらの調査内容から、「基礎基本運動」の習熟状況

表2 調査対象者の基本的特性

学年	男 子		女 子		全 体		χ^2 検定
	N=102	N=126	N=228	n	%	n	
1年生	14	13.7	19	15.1	33	14.5	$\chi^2=2.344$ DF=5 n.s
2年生	15	14.7	13	10.3	28	12.3	
3年生	17	16.7	21	16.7	38	16.7	
4年生	14	13.7	23	18.3	37	16.2	
5年生	20	19.6	28	22.2	48	21.1	
6年生	22	21.6	22	17.5	44	19.3	
合計	102	44.7	126	55.3	228	100.0	

と客観的指標と考える子どもの「体力」と「運動習慣」の実態との関係を明らかにするために、新体力テスト及び歩数調査の結果とアンケート調査で収集されたデータから子どもの基本的特性、スポーツ特性、「基礎基本運動」5種目における子どもの運動達成度の項目を中心に必要に応じて χ^2 検定を用いた。

III. 結果と考察

1. 子どもの運動・スポーツに対する諸特性

(1) 運動・スポーツ特性

表3は、子どものスポーツ特性を示している。子どもの運動・スポーツにおける「好き嫌い」「得意不得意」「体力への自信の有無」は、子どもの運動・スポーツに対する特性を表す重要な要素であり、実際の子どものスポーツ活動を把握するための指標となるものである。

運動・スポーツの「好き嫌い」において、全体では「好き」64.6% (n=95), 「どちらかといえば好き」23.8% (n=35), 「どちらかといえば嫌い」10.9% (n=16), 「嫌い」0.0% (n=0) であり、圧倒的に運動・スポーツが好きになる者が多く全体の約9割を占めた。この結果は、性別間で比較した場合、男女共に同様の結果を示した。「得意不得意」において、全体では「得意」35.3% (n=52), 「どちらかといえば得意」40.8% (n=60), 「どちらかといえば不得意」19.3% (n=28), 「不得意」3.3% (n=5) であり、運動・スポーツを得意とする者が全体の約7割強を占めた。性別間で比較した場合、男女共に同様の結果を示した。「体力の自信の有無」において、全体では「ある」31.3% (n=46), 「どちらかといえばある」40.8% (n=60), 「どちらかといえばない」21.7% (n=32), 「ない」4.1% (n=6)

表3 調査対象者のスポーツ特性

スポーツ特性	性別		男子		女子		全体		χ^2 検定
			N=63		N=84		N=147		
	n	%	n	%	n	%	n	%	
運動・スポーツの好き嫌い									
	好き	42	66.7	53	63.1	95	64.6		$\chi^2=1.061$ DF= 3 n.s
	どちらかといえば好き	16	25.4	19	22.6	35	23.8		
	どちらかといえば嫌い	5	7.9	11	13.1	16	10.9		
	嫌い	0	0.0	0	0.0	0	0.0		
	不明	0	0.0	1	1.2	1	0.7		
運動・スポーツの得意・不得意									
	得意	24	38.1	28	33.3	52	35.3		$\chi^2=1.177$ DF= 3 n.s
	どちらかといえば得意	24	38.1	36	42.9	60	40.8		
	どちらかといえば不得意	11	17.5	17	20.2	28	19.3		
	不得意	3	4.8	2	2.4	5	3.3		
	不明	1	1.5	1	1.2	2	1.3		
体力の自信への有無									
	ある	22	35.0	24	28.6	46	31.3		$\chi^2=2.796$ DF= 3 n.s
	どちらかといえばある	22	35.0	38	45.2	60	40.8		
	どちらかといえばない	14	22.2	18	21.4	32	21.7		
	ない	4	6.3	2	2.4	6	4.1		
	不明	1	1.5	2	2.4	3	2.1		

表4 調査対象者の基礎基本運動達成状況

基礎基本運動	達成度	男子		女子		全体		χ^2 検定
		N=63		N=84		N=147		
		n	%	n	%	n	%	
50m 走	速い	21	33.3	17	20.2	38	25.9	$\chi^2=4.650$ DF= 3 n.s
	普通	32	50.8	47	56.0	79	53.7	
	遅い	10	15.9	18	21.4	28	19.0	
	わからない	0	0.0	2	2.4	2	1.4	
逆上がり	できる	13	20.7	28	33.3	41	27.9	$\chi^2=10.056$ DF= 3 P<0.05
	普通	16	25.4	26	31.0	42	28.6	
	できない	28	44.4	29	34.5	57	38.7	
	わからない	6	9.5	1	1.2	7	4.8	
25m 水泳	できる	19	30.2	33	39.3	52	35.4	$\chi^2=1.471$ DF= 3 n.s
	普通	25	39.7	31	36.9	56	38.1	
	できない	17	27.0	18	21.4	35	23.8	
	わからない	2	3.1	2	2.4	4	2.7	
キャッチボール	できる	19	30.2	9	10.7	28	19.0	$\chi^2=9.081$ DF= 3 P<0.05
	普通	32	50.8	57	67.9	89	60.6	
	できない	4	6.3	5	6.0	9	6.1	
	わからない	8	12.7	13	15.4	21	14.3	
足でのパス	できる	20	31.7	6	7.1	26	17.7	$\chi^2=15.140$ DF= 3 P<0.01
	普通	31	49.2	59	70.2	90	61.2	
	できない	5	7.9	8	9.5	13	8.8	
	わからない	7	11.2	11	13.2	18	12.3	

であり、体力に自信がある者が全体の約7割強を占めた。性別間で比較した場合、男女共に同様の結果を示した。このことから、とても運動意欲の高い子どもたちが多いことを示した。

(2) 基礎基本運動の達成状況

表4は、基礎基本運動の各種目における達成状況を示している。各種目において、特に「逆上がり」「キャッチボール」「足でのパス」に男女間において特徴的な結果を示した。逆上がりにおいて、「うまくできる」男子20.7% (n=13)、女子33.3% (n=28)、「普通にできる」男子25.4% (n=16)、女子31.0% (n=26)、「うまくできない」男子44.4% (n=28)、女子34.5% (n=29)の結果から、男子より女子は、逆上がりが上手にできるといえる。さらに、男女共に「うまくできない」者が多いことから、子どもたちは、この運動を達成するため

の障壁のひとつとなっていることが伺える。

次に、キャッチボールにおいて、「うまくできる」男子30.2% (n=19)、女子10.7% (n=9)、「普通にできる」男子50.8% (n=32)、女子67.9% (n=57)、「うまくできない」男子6.3% (n=4)、女子6.0% (n=5)の結果を示した。さらに、足でのパスにおいて、「うまくできる」男子31.7% (n=20)、女子7.1% (n=6)、「普通にできる」男子49.2% (n=31)、女子70.2% (n=59)、「うまくできない」男子7.9% (n=5)、女子9.5% (n=8)の結果を示した。この2つの結果から、逆上りの結果とは反対に、女子より男子の方が、上手にできるといえる。

(3) 新体力テストの総合評価

図2・表5は、文部科学省が作成したテスト項目と得点及び総合評価の判定基準により、調査対象校の平

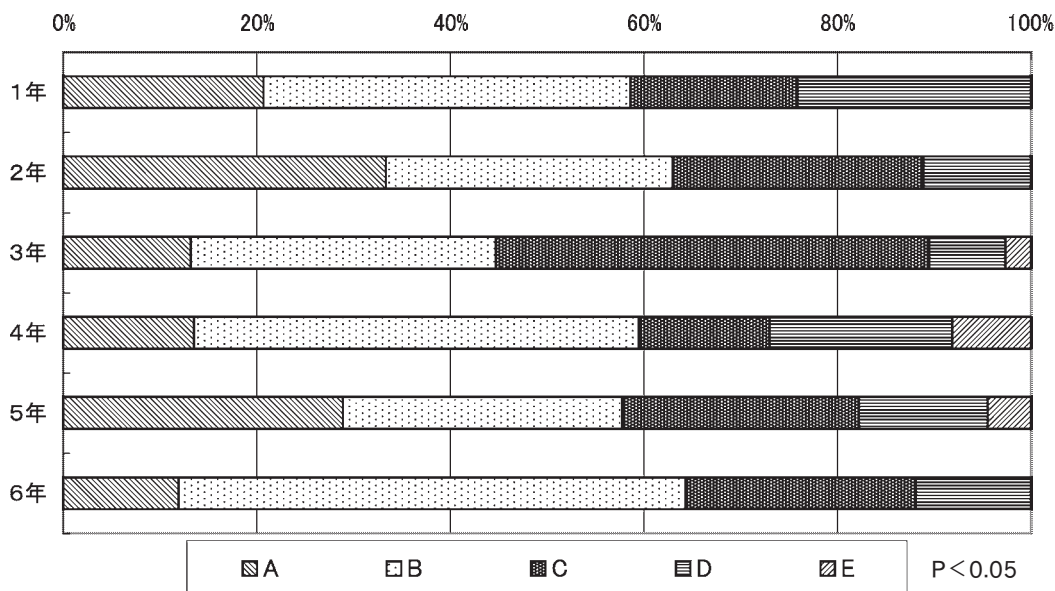


図2 調査対象者の新体力テスト総合評価

表5 調査対象者の新体力テスト総合評価

総合評価	1年		2年		3年		4年		5年		6年		χ^2 検定
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	
A	6	18.2	9	32.1	5	13.2	5	13.5	13	27.1	5	11.4	$\chi^2=40.664$ DF=25 P<0.05
B	11	33.3	8	28.6	12	31.6	17	45.9	13	27.1	22	50.0	
C	5	15.2	7	25.0	17	44.7	5	13.5	11	22.9	10	22.7	
D	7	21.2	3	10.7	3	7.9	7	18.9	6	12.5	5	11.4	
E	0	0.0	0	0.0	1	2.6	3	8.1	2	4.1	0	0.0	
不明	4	12.1	1	3.6	0	0.0	0	0.0	3	6.3	2	4.5	

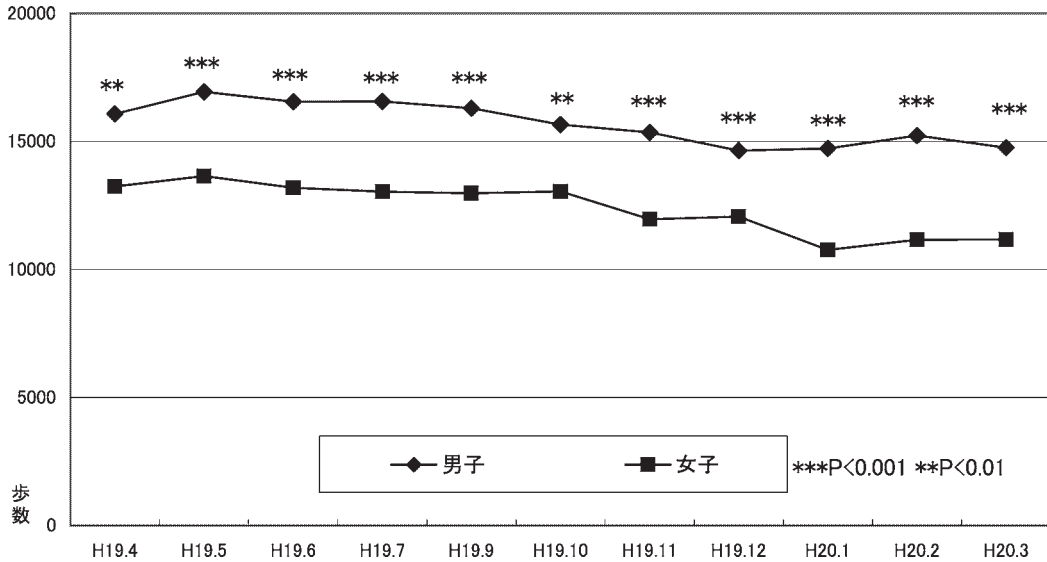


図3 調査対象者の一日の平均歩数

表6 調査対象者の一日の平均歩数

年月	性別		T 値			
	男子 N=63 平均	SD	女子 N=84 平均	SD		
H19.4	16079.0	9056.2	13244.9	4626.8	2.7	**
H19.5	16940.3	6337.3	13652.8	4790.5	4.1	***
H19.6	16553.4	6229.1	13197.2	4147.3	4.4	***
H19.7	16571.3	6129.2	13045.3	6149.6	3.9	***
H19.9	16300.3	6298.8	12979.9	4815.6	3.7	***
H19.10	15659.9	5951.6	13051.8	4790.7	3.3	**
H19.11	15355.4	5856.3	11966.2	4012.2	4.2	***
H19.12	14650.0	6517.5	12063.1	3613.9	2.9	***
H20.1	14729.6	5829.3	10765.1	3741.4	5.3	***
H20.2	15232.7	6119.3	11168.0	4359.5	4.9	***
H20.3	14758.4	5930.2	11176.3	3916.5	4.5	***
平均 (歩)	15711.8		12391.9			

成19年度に行われた新体力テストの総合評価を学年別に示したものである。全体では「評価A」18.4% (n=27), 「評価B」39.5% (n=58), 「評価C」21.8% (n=32), 「評価D」13.6% (n=20), 「評価E」2.0% (n=3) であり, 「評価B」が最も多く, 次いでC, A, D, Eの順番であった。男女間において特徴的にみられるものはなかったが, 学年間において, 「評価A」は2年生32.1% (n=9) が最も多くみられ, 運動能力の高い学年であることを示した。

(4) 歩数

図3・表6は, 平成19年4月から平成20年3月まで

の各月ごとの一日の歩数平均推移をグラフ化したものである。男子の一日の平均は15711歩, 女子の一日の平均は, 12391歩であったことから, 男子と女子で約3000歩強の差があり, 男子の方が多く歩いている結果となった。男子は, 特に日常生活においても活発に活動している状況にあることを示した。

2. 基礎基本運動達成度と子どものスポーツ特性との関係

図4・表7及び図5・表8は, 基礎基本運動の50m走及びキャッチボールの達成度と運動の好き嫌いとの関

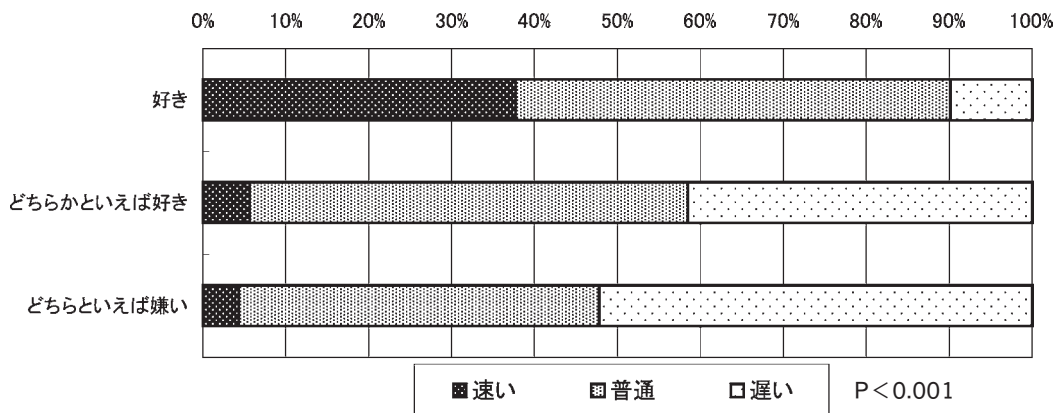


図4 基礎基本運動達成度と運動の好き嫌い (50m 走)

表7 基礎基本運動達成度と運動の好き嫌い (50m 走)

好き嫌い	50m 走		速い N=49		普通 N=102		遅い N=46		χ^2 検定
	n	%	n	%	n	%			
好き	46	37.3	64	52.5	12	9.8	$\chi^2=44.337$ DF= 6 ***		
どちらかといえば好き	3	5.7	28	52.8	22	41.5			
どちらかといえば嫌い	1	4.3	10	43.5	12	52.2			
嫌い	0	0.0	0	0.0	0	0.0			

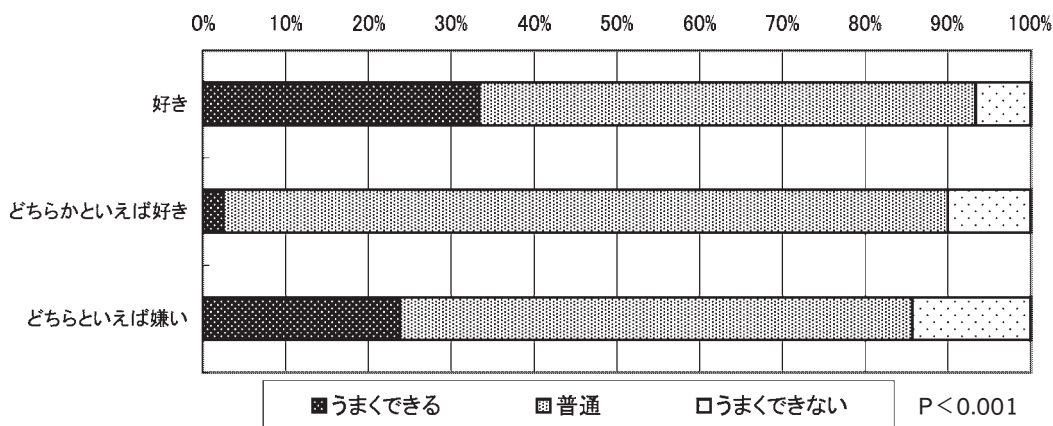


図5 基礎基本運動達成度と運動の好き嫌い (キャッチボール)

表8 基礎基本運動達成度と運動の好き嫌い (キャッチボール)

好き嫌い	キャッチボール		うまくできる N=41		普通 N=111		うまくできない N=14		χ^2 検定
	n	%	n	%	n	%			
好き	35	33.3	63	60.0	7	6.7	$\chi^2=33.053$ DF= 6 ***		
どちらかといえば好き	1	2.5	35	87.5	4	10.0			
どちらかといえば嫌い	5	23.8	13	61.9	3	14.3			
嫌い	0	0.0	0	0.0	0	0.0			

係を示した。図4・表7の50m走と運動の好き嫌いとの関係において、「速く走ることができる」という子どもは、「運動が好き」とする者が最も多く(37.3%)、「走りは遅い」という子どもは「どちらかといえば運動が嫌い」という結果を示した(52.2%)。これは、逆上がりについても同様の結果となった。すなわち、50m走及び逆上がりは、「速く走ることができるから運動が好き」「足が遅いから運動が嫌い」という「できるーできない」の達成をするということに重要な意味を持つ運動であるといえる。一方、図5・表8のキャッチボールにおいて「うまくできる」という子どもは、50m走と同様「運動が好き」とする者が多かったが(33.3%)、ここでは、「うまくできる」という子どもにおいて「どちらかといえば運動が嫌い」(23.8%)とする者が50m走の結果より多い結果を示した。足でのパスにおいても同様の結果であった。この結果から、この種目は50m走や逆上りの習熟のための特徴としてみられた「できるーできない」の関係だけではなく、子どもが運動・スポーツを行うにあたって「対人や仲間」などの

周囲にある要因が重要な意味を持つのではないかと考える。これは、まさにチームスポーツの基本的な特性がここにもあらわれていると言える。

3. 基礎基本運動達成度と子どもの客観的指標

図6・表9は、男子における新体力テストの総合評価と基礎基本運動のひとつである50m走の達成度をクロス集計した結果である。

最も高い評価であるAの男子において、「速く走ることができる」と感じている者は62.5%(n=5)と最も高い値を示し、「速さは普通である」と感じている者は37.5%(n=3)、「足は遅い」と感じている者は0.0%(n=0)となった。また、最も低い評価であるEにおいて、「速く走ることができる」及び「走る速さは普通である」と感じている者はおらず、全ての者が「走りは遅い」100.0%(n=3)と感じていた。これは、女子も同様の結果であった。新体力テストの評価が高い子どもは、自分自身を「足が速い」と認めている者が多く、評価が下がるにつれ、「足が遅い」と感じている

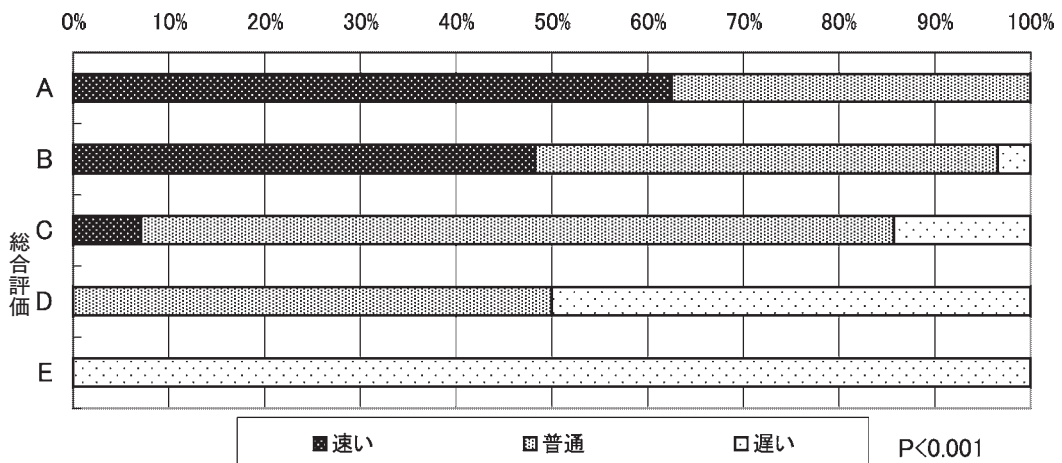


図6 基礎基本運動達成度と新体力テスト総合評価 (男子50m走)

表9 基礎基本運動達成度と新体力テスト総合評価 (男子50m走)

50m走 総合評価	速い		普通		遅い		全体		χ^2 検定
	n	%	n	%	n	%	n	%	
A	5	62.5	3	37.5	0	0.0	8	12.7	$\chi^2=35.478$ DF=10 P<0.001
B	14	48.3	14	48.3	1	3.4	29	46.0	
C	1	7.1	11	78.6	2	14.3	14	22.2	
D	0	0.0	3	50.0	3	50.0	6	9.5	
E	0	0.0	0	0.0	3	100.0	3	4.8	
不明	1	3.3	1	3.3	1	3.3	3	4.8	

者が多くなっていることが伺える。このことから、子どもは、自分自身の持っている体力・運動能力の実態と基礎基本運動の達成度に大きな違いはないと自分の状況をしっかり把握できているといえる。

表10は、図6・表9で示した50m走の種目以外の種目及び性別との関連性をみるために、5種目全ての達成度とクロス分析した結果を男女別に一覧に示したものである。新体力テストの評価の高低が、男子は50m走、女子は50m走、逆上がり、水泳の種目に影響することが示された。特に女子において、多種目に影響を及ぼすことを示した。女子に顕著にみられた種目は、すべて「達成型」である。「できるーできない」の達成

表10 基礎基本運動達成度と新体力テスト総合評価

達成度	客観的指標	
	新体力テスト	総合評価
	男子	女子
50m 走	◎	◎
逆上がり	×	◎
25m 水泳	×	△
キャッチボール	×	×
足でのパス	×	×

◎：*** P<0.001 ○：** P<0.01
△：* P<0.05 ×：n.s

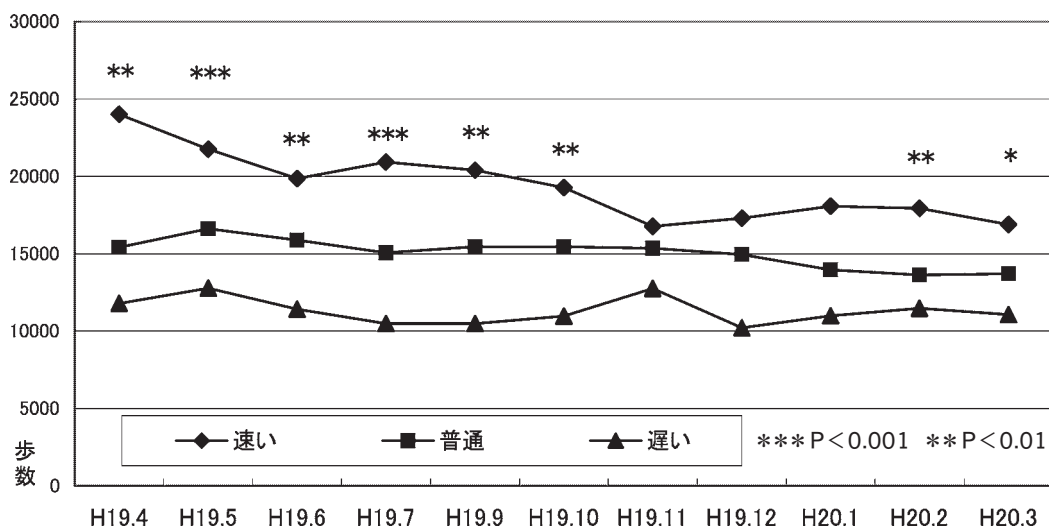


図7 基礎基本運動達成度と歩数 (男子50m 走)

表11 基礎基本運動達成度と歩数 (男子50m 走)

年月	速い N=21		普通 N=31		遅い N=9		F 値
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
H19.4	24012.9	15117.6	15426.6	4449.4	11791.6	4663.7	6.5 **
H19.5	21755.8	6936.4	16625.6	4911.0	12778.5	4207.6	9.2 ***
H19.6	19849.3	7637.4	15874.1	5119.9	11427.6	1716.3	5.4 **
H19.7	20920.2	6576.2	15066.5	4367.6	10489.6	3454.4	10.8 ***
H19.9	20391.9	7613.3	15457.8	5137.8	10492.4	2772.4	7.0 **
H19.10	19277.4	6724.6	15459.8	5231.1	10978.0	3049.3	5.4 **
H19.11	16782.6	6719.2	15357.0	5359.5	12763.4	2964.3	1.0
H19.12	17302.7	7976.7	14951.3	5332.6	10222.4	3313.0	2.8
H20.1	18076.1	7171.0	13970.6	4784.9	11000.3	2542.8	5.4 **
H20.2	17938.1	6895.7	13626.0	5182.7	11486.0	2809.5	4.4 *
H20.3	16889.2	6302.3	13707.8	5227.7	11064.8	4992.9	2.9
平均(歩)	19381.5		15047.6		11317.7		

IV. 結 論

本研究では、子どもの特性及び体力・運動習慣の実態との関連から、「基礎基本運動の習熟状況」を明らかにし、基礎基本運動がそれぞれの要素に及ぼす関わりについて検討した。結果は以下のように要約される。

1. 基礎基本運動の習熟が体力の向上と運動習慣の形成に深く関わりがあることが明らかとなり、小学生の体育・スポーツ教育での基礎・基本の習得の重要性を強く示した。
2. 本研究で取り上げた基礎基本運動の各種目の達成度と、体力、運動習慣及び運動の好き嫌いとの分析の結果から、基礎基本運動の種目の特性による指導や教育の方向性が示唆された。すなわち、50m 走（かけっこ）や逆上がりなどの向上や達成を志向する種目では、達成できるための明確な教育の方法と内容が重要なポイントとなるのに対して、対人的な要素を多く含むボール蹴り（パス）やボール投げ（キャッチボール）は必ずしも基礎基本技術の習熟だけがポイントとなるのではなく、仲間関係や他人との交流のスキルが指導や教育の内容としての重要なポイントとなることを示した。

今後はさらに、種目を広げたより多くの基礎基本運動種目の意味や特性を基礎研究することにより明確にしていくことが必要であるとともに、より実践的に指導や教育の場面に活用できる水準での効果的な内容とその具体的な方法の追及がますます重要になるものと考えられる。

参考文献

- 1) 畑 攻, 小野里真弓, 齊藤隆志, 他 (2005) スポーツマネジメントと子どもスポーツネットの企画・運用, 日本体育学会第56回予稿集, p.290.
- 2) 畑 攻, 宇土正彦, 八代 勉 (1984) 運動・スポーツ行動に対する運動者の主体的条件の類型化に関する研究, 筑波大学体育科学系紀要, p.11-19.
- 3) 江田昌佑監修 (1999) スポーツライフ白書 する 観る 視る 読む 支える 話す, ぎょうせい, p.23-45.
- 4) 佐伯聡夫, 畑 攻, 仲澤 眞 (1998) 地域におけるマルチスポーツクラブの研究, 日本スポーツ産業学会平成9年度プロジェクト研究報告書, p.3-33.
- 5) 佐藤良男, 畑 攻, 齊藤隆志 (2004) 指導者のための体育・スポーツ行政, ぎょうせい p.14-37.
- 6) 福本恵美子 (2000) マルチスポーツの実際と可能性に関する研究, 日本女子体育大学大学院修士論文.

が新体力テストの評価を左右させるといえる。また、反対に男女共に、キャッチボール、足でのパスに新体力テストの総合評価の影響がなかったことは、「できるーできない」の達成をすることだけではなく、仲間や親などと楽しみながら行うなど他の要因の関連によって、評価に影響を与えるのではないかと考える。これらのことから、性別及び種目の特性によって、子どもの「体力」との関連が異なることを示した。

図7・表11は、男子の歩数と50m 走の達成度をクロス分析した結果である。「速く走ることができる」と感じている者は、「走る速さは普通である」「走りは遅い」と感じている者と比べて、歩数の値が年間の半数以上の月で最も多い結果を示した。この結果から、図6・表9で示した50m 走と新体力テストの総合評価の関係と同様に、「速く走ることができる」という基礎基本運動の達成から、歩数をはじめとした日常生活を意欲的に活動するという「運動習慣」が形成され、「運動習慣」の形成が「もっとやりたい、上手になりたい」という運動・スポーツに対する意欲・関心が高まり、さらに運動・スポーツを行うための原点となる「基礎基本運動」をより自分のものにしていくという「基礎基本運動」と「運動習慣」に重要な関係がみられていると考える。

表12は、図7・表11で示した以外の種目及び性別との関連性をみるために、5種目全ての達成度とクロス分析した結果を男女別に一覧に示したものである。特に男子において、逆上がり以外の種目の達成度に歩数が影響することが示された。歩数の多い子どもは、日常生活においても意欲的によく体を動かしていると考えられるため、基礎基本運動の習熟は、常日頃の「運動習慣」が大きな要因となるといえる。これらのことから、性別及び種目の特性によって、子どもの「運動習慣」との関連が異なることを示した。

表12 基礎基本運動達成度と歩数

達成度	客観的指標	
	歩 数	
	男 子	女 子
50m 走	◎	×
逆上がり	×	△
25m 水泳	△	△
キャッチボール	○	×
足でのパス	○	×

◎：*** P<0.001 ○：** P<0.01

△：* P<0.05 ×：n.s

- 7) 久野 歩(2006)学校運動部活動の在り方に関する一考察—マルチスポーツの概念からのアプローチ—, 東京学芸大学大学院修士論文.
- 8) 林 園子, 畑 攻, 小野里真弓, 他(2005)都会における子どもの体力・運動能力向上の取り組みとスポーツスタイル, 日本体育学会第56回大会予稿集, p.291.
- 9) 林 園子, 畑 攻, 小野里真弓, 他(2006)都内小学校と女子体育大の連携とマネジメント, 日本体育学会第57回大会予稿集, p.154.
- 10) 林 園子, 畑 攻, 前田佳奈, 他(2007)子どもの基礎基本運動の習熟と生活習慣・運動習慣・意欲に関する研究, 日本体育学会第58回大会予稿集, p.242.
- 11) 林 園子, 畑 攻, 前田佳奈, 他(2008)子どものスポーツのサービス内容とマネジメント(1)—子どものスタイルと運動習熟状況からの検討—, 日本体育学会第59回大会予稿集, p.164.
- 12) 前田佳奈, 畑 攻, 池田延行, 他(2004)中学生・高校生の諸特性とマルチスポーツ, 日本体育学会大会第55回大会予稿集, p.377.
- 13) 前田佳奈, 畑 攻, 小野里真弓, 他(2005)子どものスポーツスタイルと保護者の期待と可能性, 日本体育学会第56回大会予稿集, p.290.
- 14) 前田佳奈(2006)子どものマルチスポーツと学校・家庭・社会, 日本女子体育大学大学院修士論文.
- 15) 前田佳奈, 畑 攻, 小野里真弓(2006)子どもスポーツの学校, 家庭および社会との連携について, 日本体育・スポーツ経営学会第29回大会号, p.37.
- 16) 前田佳奈, 畑 攻, 小野里真弓, 他(2006)子どもの体力向上実践事業の取り組みとマネジメント, 日本体育学会第57回大会予稿集, p.154.
- 17) 前田佳奈, 畑 攻, 池田延行, 他(2007)小学校における都市型連携システムとマネジメント, 日本女子体育大学紀要第37巻, p.75-87.
- 18) 前田佳奈, 畑 攻, 成瀬美紀, 他(2007)子どもの体力向上実践事業の成果とマネジメント, 日本体育学会第58回大会予稿集, p.242.
- 19) 前田佳奈, 畑 攻, 成瀬美紀, 他(2008)子どもの体力向上実践事業の成果とマネジメントの検討, 日本女子体育大学紀要第38巻, p.69-79.
- 20) 正木健雄(2003)おかしいぞ子どものからだ, 大月書店, p.34-56.
- 21) 水上雅子, 畑 攻, 小野里真弓, 他(2005)子どもの体力・運動能力向上と都市型連携システム, 日本体育学会第56回大会予稿集, p.291.
- 22) 水上雅子, 畑 攻, 前田佳奈, 他(2007)親の運動者行動及び運動生活に関する研究, 日本体育学会第58回大会予稿集, p.242.
- 23) 水上雅子, 畑 攻, 前田佳奈, 他(2008)子どものスポーツのサービス内容とマネジメント(2)—親の運動者行動及び運動生活が及ぼす子どもの体力への影響—, 日本体育学会第59回大会予稿集, p.165.
- 24) 文部科学省(2002)子どもの体力向上のための総合的な方策について(答申), 中央教育審議会.
- 25) 文部科学省(2006)スポーツ振興基本計画.
- 26) 文部科学省(2005)平成16年度体力・運動能力調査報告書.
- 27) 文部科学省(2007)第5回子どもの体力向上実践事業全国連絡会議, 会議資料.
- 28) 文部省(1995)小学生のスポーツ活動に関する調査研究報告書.
- 29) 武藤芳照(1989)子どものスポーツ, 財団法人東京大学出版会, p.75-87.
- 30) 山下秋二, 中西純司, 畑 攻, 他(2006)改訂版スポーツ経営学, 大修館書店, p.154-156.
- 31) 文部科学省(2000)小学校学習指導要領解説, 東山書房, p.3-15.

(平成20年9月17日受付)
(平成20年11月26日受理)

